

学位被授与者氏名	末吉 弘聖（すえよし こうせい）
論文題目	農山村移住者と家族の生活史 ー 移住と創業の意思決定過程を通して ー
論文審査結果の要旨	本論文は、農山村に移住し創業を行った家族を対象に、ライフストーリー法を用いて移住および創業の意思決定過程を明らかにしようとした研究であり、近年の地方移住研究において十分に検討されてこなかった「家族関係」「ライフコース」「地域との関係性の動態」に着目した点に独自性が認められる。従来の研究では、移住の動機や定住の成否といった側面に焦点が当たりやすかったのに対し、本研究は移住を継続的な生活実践の一部として捉えようとしている点で意義がある。研究目的は、移住を個人の選択としてのみ捉えるのではなく、家族や地域との関係のなかで意味づけられる過程として把握することであり、その問題設定は、人口減少や地域再生が社会的課題となる現代において一定の社会的関心とも接続していると評価できる。 研究方法としては、半構造化インタビューによるライフストーリー法を採用し、予備調査を経た対象者選定や逐語録作成、時系列的整理を通じた分析が行われており、質的研究としての手続きは概ね適切である。特に、予備調査から本調査へと段階的に調査設計を進め、対象者の語りを丁寧に整理している点は、本研究の信頼性を高める要素となっている。また、調査対象者本人に加えて家族への聞き取りを実施している点は、本研究の問題意識と整合しており、個人の語りだけでは捉えきれない意思決定の背景や関係性を多面的に把握することを可能としており、分析の厚みにつながっている。 分析の結果、移住の意思決定が単一の動機によるものではなく、偶発的契機、過去の経験、家族事情、地域環境など複数要因の相互作用によって形成されることが示され、さらに地域との関わりや家族のライフステージの変化が居住継続や創業に影響することが明らかにされた。これらの知見は、移住を静態的な定住モデルとしてではなく、変化や再選択を含むプロセスとして理解する視点を提示しており、移住研究に対して新たな示唆を与えている。また、移住支援や地域政策を考える際に、個人のみならず家族単位での支援や環境整備の必要性を示唆した点は、学術的意義に加えて実践的含意も有している。 一方で、審査過程において指摘されたように、研究の問題意識や分析枠組みについては質疑応答を通じて明確化された側面があり、論文本体において理論的枠組みや概念整理をより明示的に記述する余地が残されている。また、「ライフスタイル移住の増加」に関する先行研究の整理や位置づけについては、より広い文献検討が行われれば、本研究の学術的位置づけや独自性がさらに明確になったと考えられる。これらは研究の完成度を一層高めるための課題として位置づけられる。 ただし、これらの点は研究の根幹を損なうものではなく、研究者はサンプリングや分析上の判断について一定の説明責任を果たしており、調査・分析の過程は誠実かつ丁寧に遂行されている。加えて、ミクロな生活史に着目した継続的な聞き取りと、得られた語りを多面的に理解しようとする分析姿勢は、本研究の重要な特徴として評価できる。対象事例の限界を自

	覚しつつも、具体的な経験に基づいて理論的示唆へと接続しようとする姿勢は、修士論文として十分に評価に値するものである。 2026年2月16日に、北九州市立大学北方 キャンパス 3号館 3-218 教室において、審査委員全員出席のもとで最終試験を実施して学力を確認し、論文の説明を受け、質疑応答ののちに、全員一致で当該論文が修士（人間関係学）として十分な内容であると判定した。
--	--